

## [第633回 大阪放送番組審議会議事録]

1. 開催日時 新型コロナウイルスの感染リスクを避けるため、会議室での審議を止め、委員全員に書面参加で対応してもらった。書面提出の期日を令和3年1月28日(木)とした。

2. 開催場所 上記参照

3. 委員の出欠 委員の総数 6名

※ 新型コロナウイルスの感染リスクを避けるため書面参加で対応

書面参加の総数 6名

書面参加の委員氏名

成瀬 國晴	河内 厚郎
たつみ 都志	鎌田 雅子
萩原 章男	内田 透

4. 議題

1) 番組審議(書面参加) 『おめでとうございます!はるか・かなたさん  
芸歴50年!』

2) その他

## 5. 議 事 の 概 要

議題1) 『おめでとうございます！はるか・かなたさん 芸歴50年！』  
について、番組の企画意図・内容の資料をご覧のうえ、番組を聴取  
してもらい、書面でご意見を提出してもらった。

## 6. 審 議 内 容

社 側 <番組資料を送付>

昨年8月にコンビ結成50年を迎えた漫才コンビ、海原はるか・かなたの  
お祝い番組です。同じ事務所所属の女性漫才コンビ、チキチキジョニーの  
石原祐美子が進行を務めました。はるか・かなたの近況、ますだ・おかだ  
増田英彦のお祝い電話を交え、50年の漫才人生をたっぷり振り返り、最  
後に第35回上方漫才大賞での奨励賞受賞漫才をお送りしました。

<各委員の書面でのご意見>

委 員 ほっとする、ゆったりとした気分でリラックスした時間を過ごせる番組を聴かせてい  
ただいたという印象。結成50年という大御所中の大御所だが、ちっとも偉ぶるよ  
うなところがないお二人の人柄がにじみ出ている、温かい気持ちになる1時間。  
チキチキジョニー・石原さんもゆったりとした進行で番組全体を和ませてくれた。  
ただし、中身は興味深いお話がてんこ盛り。特に、はるか・かなたの代名詞であ  
る「髪吹き芸」の誕生秘話は面白かった。横山たかしさんとの楽屋トークがあって、  
直後の舞台がドライバーのネタ。かなたさんがとっさにアドリブで息を吹き付ける。  
驚いた客は一瞬引いて、直後に爆笑の渦。その光景が目には浮かぶようだった。  
最近では舞台にアクリル板が設けられ、髪吹き芸ができないという話には、「ああ、  
なるほど。コロナ禍はこんなところにも影響していたのか」と。はるかさんが自分で  
小型扇風機や扇子で代用しているとか。ベテランの困惑と工夫が逆におかしか  
った。

ベテランらしさといえば、例えば、はるかさんが最近ベンチプレスにハマっている  
という話を聞いた時、かなたさんが「何や、それ」と突っ込み、ベンチプレスがわか  
らない人のためにどんなものをうまく説明させる。さりげない配慮はさすが。  
かなたさんが腰を患い1年半あまり休演していたというのも、私にとっては初めて  
知る話だったが、はるかさんが「いつまでも待つからゆっくり治して」と言ってくれた  
とか。最近では少なくなりましたが、仲の良いコンビの話は気持ちがいいもの。

全体的に、流れに任せたような構成でありながら、はるか・かなたの魅力、50年の歩みがうまく凝縮されていて、好感が持てた。リスナーも満足されたのではないだろうか。

委員 はるか・かなたさんの芸歴50年をただ称えるのではなく、お二人の芸や人に対する人生観が好印象となって伝わる番組になっていた。お二人が、お笑いに一心に取り組んで来られたこと、年齢、立場によらず多くの人に感謝の気持ちを持ち続けられていることや、今も若い世代の考えを汲み取る努力をされていることなど、人柄や姿勢が自然に伝わってきた。最初、えらく真面目な感じで始まったことも結果としていい流れを作ったと思う。テレビ番組出演や髪芸のきっかけのエピソードは、すでにひとつの芸になっている感はあるが、そのエピソードにもお二人の人柄がにじみ出ている。お二人には、テレビ出演も舞台上で多くの人を笑わせるツールなのだろう。かなたさんの「もっと笑わせられるはず」や、はるかさんの「50年続ける才能だけはあった」という言葉が、つくられた謙虚さでなく、50年間一筋の重みとして聞く側の心に響き、さらに芸として漫才を聞きたくなる番組内容であったと思う。

石原さんは、若者の立場から、お二人が若者からも支持されていることなど、お二人の話ではわかりにくいことを広げ伝えようとしていた。ただ、ジムやロックフェスのエピソードは内容や面白さが薄いように感じた。もっと思い切った進行をしてもよかったのでは。

委員 周年お祝い番組を聴いて、私も本当におめでとうございますと言いたくなった。

昔からお二人の仲がいい、後輩から慕われる優しい人柄が余すところなく引き出せている番組だと思う。お二人の漫才聞けたらいいのにと思っていたところに、最後に漫才が聴けてうれしかった。

漫才師といえば仲が悪いということをよく聞くが、お互いにいたわりあい、優しい人柄で長年仲良くやっているということや、電話ゲストなどの話を聞いて、松竹芸能の先輩後輩の仲の良さもよく伝わり、聞いていてとても清々しい気持ちになった。

進行役のチキチキジョニーさんは、先輩を敬いながらも話を引き出していて、はるか・かなたさんのお二人も親しい後輩ということもありリラックスして話をされているのが伝わってきた。とても聴きやすかったし、この人選は正解だと思う。

気になった点は、最初の「チキチキジョニーの石原です」が突然だと感じた。細かい話だが、ちゃんと「松竹芸能漫才コンビ、チキチキジョニーの～」というべきだと思う。

あと、プロフィール紹介のところだけ急に曲調が変わり、固い感じの番組という雰囲気になってしまっていたように感じる。もっと明るい感じの紹介で、チキチキジョニーさんにお任せしてもよかったのかなと思った。

「やすし・きよし」「オール阪神・巨人」といえばすぐに顔が思い浮かぶ。「海原はるか・かなた」と聞くと、お二人の顔は思い浮かぶが、正直な話どちらがはるかさんで、どちらがかなたさんなのか、私にはわからなかった。

そういう意味では、プロフィール紹介の真ん中あたり、髪の毛を吹き飛ばす芸でブレイク、という紹介でやってお二人の名前と顔が一致した。

これも細かい話だが、プロフィールの一番最初に「髪の毛を吹き飛ばされる方がはるかさん、吹き飛ばす方がかなたさん」がパッとわかる紹介を入れたほうが、リスナーに優しい番組になるのかと思った。

この番組を聞いてはるか・かなたさんのファンになった。

これからもますますのご活躍を期待しております。

委員 進行役の石原祐美子さんの声は聞きやすく心地よい声だった。

#### ●総論

私は最初、海原はるか・かなたの顔が浮かばなかった。そのせいで声の主がどちらかも分からず、まして「毛をふっと吹く芸」も、おぼろげな記憶しかない。もし私のようなリスナーがこの番組を聞いたら、なかなかついていけないと思う。

顔の出ないラジオなので、（まるで衆知のごとく）詳しい紹介もないままスタートするのはいかがなものか？ご両人には失礼かもしれないが「お聞きの皆様、海原はるかかなた師匠です。一度はテレビ等でご覧になったことがあるかと思いますが、相方の髪をふっと吹くと髪がはらっと飛んで、頭頂が丸見えになる究極の芸。その七三ならぬゼロジウ分けのはるか師匠と、吹き役のかなた師匠です」とでも紹介してほしかった。

そうすれば、まさに一度は見たことのある漫才なので、ああ、と納得がいったと思う。私は一回目は運転しながら聴いて、最後までどっちがどっちとも分からずじまい。

今ネットでご両人を確認したうえで、このレポートを書いている。

情報が共有出来てはじめて、アクリル版で、「毛をふっと吹く芸が出来ない」から、扇風機やうちわで代役したという苦労話を納得し、面白く

感じれる。

◆増田英彦お祝い電話

増田英彦さんとの電話のやり取りも、「めっちゃイケ」という番組名や芸人の名前がやたらと出てきて、仲間内で盛り上がっている感が強く、番審でなければ途中でチャンネルを変えてしまうだろうと思った。

ラジオはリスナーと情報共有するツールが少ない分（テレビだとテロップで注釈が出たり、顔写真が出たりする）司会者の役割は大きい。なんとか、終わりごろの「今日はお祝いを」と話題を振ってやっと軌道修正された感じ。

◆漫才人生を振り返る

二人の軌跡は興味深く聞いた。役者から漫才に転向した理由も面白く、様々な舞台の話も興味深い。

「髪を吹く芸」のいきさつも面白い。かなた師匠の記憶が確かで驚いた。

「一発芸」の生まれる瞬間の偶然という「必然」性も面白い。

◆2000年4月 第35回上方漫才大賞奨励賞受賞漫才

50歳台前半の一番油の乗ったころの漫才であろう。テンポも間も抜群。さすが。

委員

コンビ結成50年を迎えた、海原はるか・かなたのお祝い番組ということで、プロフィールからコンビ結成、ネタづくり、そして最後に漫才を紹介する。聞き手の石原祐美子（チキチキジョニー）は、歯切れよく、先輩芸人の話題を引き出す進行役をそつなくこなしていて、好感が持てる。

コロナウィルス感染の予防対策として、漫才をするにも、2m離れるとか、アクリル板で遮るなどの舞台上の対策が語られてはいるが、その後、ニュースで二人とも感染したと報じられた。気の毒なことである。

増田（ますだ・おかだ）からの電話は、噛み合わないやりとりが続き、やや長すぎると思った。

はるか・かなたは二人とも、曾我廼家明蝶の設立した「明蝶（芸能）学院」の出身で、俳優を目指していたとのこと。（余談だが、はるかの顔が俳優の田山涼成にそっくりで、よく間違える）海原お浜・小浜に弟子入りするまでのエピソードが語られる。かなたが言うには「通行人として舞台上上がるより、漫才なら客の半分は自分を見てくれるから、注目度が違う。だから俳優への道を諦めて漫才を選んだ」とのこと。はるかの間人関係もあって、お浜・小浜に弟子入りしたこと、その後の売れない頃の苦労話、笑いを取れた時の様子などを振り返る。

中でも、禿ネタ（失礼）の誕生秘話は、この番組のメインであろう。ネタづくりの決め手となった、横山たかしの楽屋話は、その追悼公演に至るまで、因縁を感じさせて余りある。「私には（漫才を）続ける才能があった」という、はるか自己分析は含蓄があり、興味深い。人柄の良さも感じられる。

リスナーへのひとことは、皆さんへの恩返し、体の続く限り、とそれぞれの思いが滲む。

最後に聞いた20年前の漫才は、格別に面白いものでもないが、不快な気には絶対にさせないところがこの人たちの持ち味といえる。

委員 楽しい1時間だった。

日曜日の深夜に放送されたのは残念と思った。

曜日、時間を変えて放送したらともとも思った。

さすがキャリア50年のコンビだけあって喋りがしっかりしていて楽しい。はるか・かなたは、髪の毛を吹き飛ばすテレビ的な見せる漫才コンビだが、下積み時代の苦労話はこの年齢になって笑い話でするには奥行きと味があり、ラジオだからじっくり聴けた。

とくに毛ネタのキッカケとなった故・横山たかしの楽屋でのエピソードはおもしろかったしその追悼公演で復帰した話もしんみりしてよかった。同じ松竹芸能で気心が知れた石原裕美子は、インタビューを含む応答とふたりの話の引き出し方もうまかった。

増田英彦が電話で話すエピソードはゆっくりあり、石原裕美子の「お祝いメッセージを」と振るまで興味がつきなかった。

最後の「第35回上方漫才大賞奨励賞受賞漫才」は、ラジオ、テレビ放送もちゃんとわきまえてラジオでもじゅうぶん通用するベテランの味になっていた。

社側 書面での貴重なご意見、ありがとうございました。

以上

7. 審議会の答申又は改善意見に対してとった措置および年月日

な し

8. 審議会の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表内容・方法及び年月日

- ・「番組審議会だより」 (第633回大阪放送番組審議会議事録の要約)  
「愛してラジオ大阪」 内で放送  
放送日 令和3年 2月 17日 (水) 23時20分～23時30分
- ・「番組審議会だより」 (第633回大阪放送番組審議会議事録)  
ラジオ大阪ホームページ (<http://www.obc1314.co.jp>) に掲載
- ・ 番組審議会の議事録の原本は事務局立ち会いのもと閲覧に応じる。